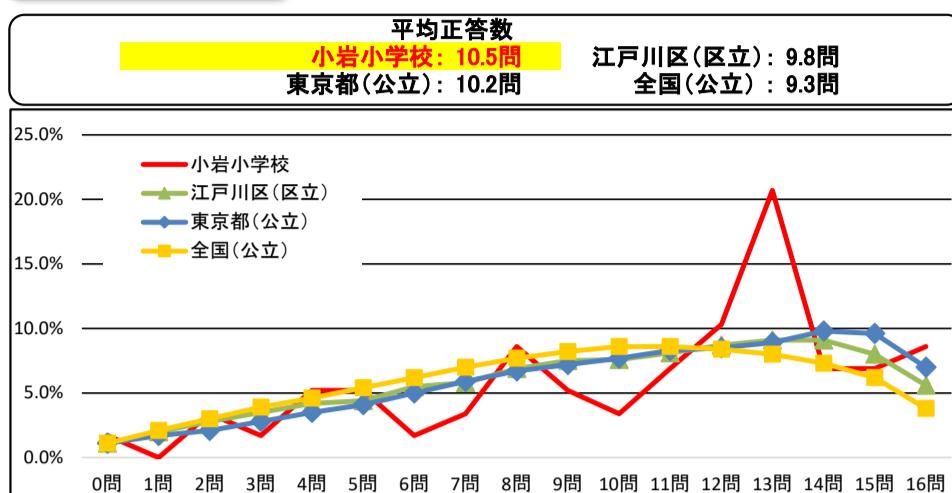


令和7年度全国学力・学習状況調査 結果分析表【算数】 江戸川区立小岩小学校

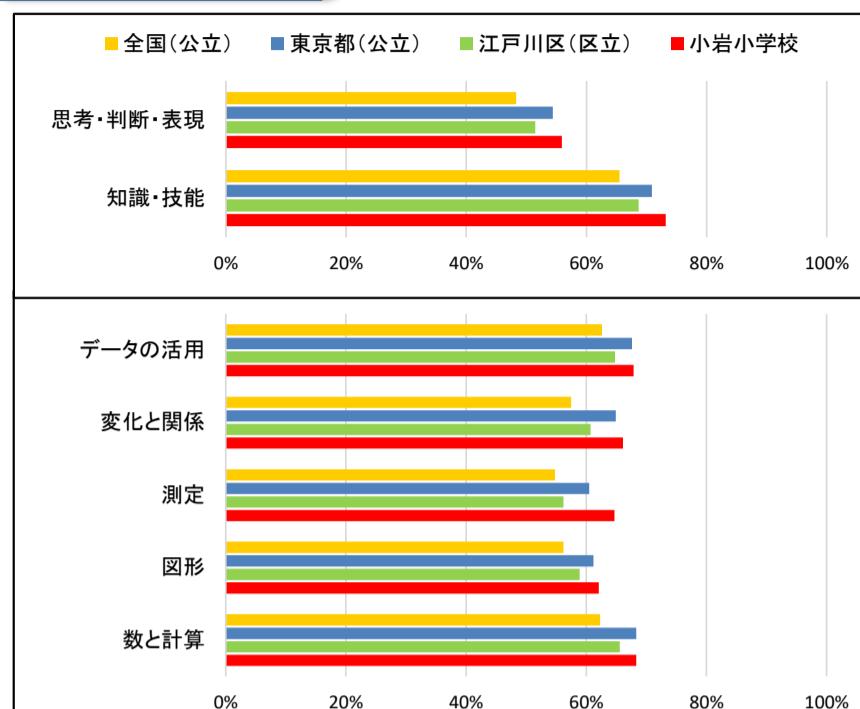
正答数分布



【平均正答率の差】

小岩小学校	66%
江戸川区(区立)	61%
東京都(公立)	64%
全国(公立)	58%
都との差(ポイント)	2.0

「領域別」の結果

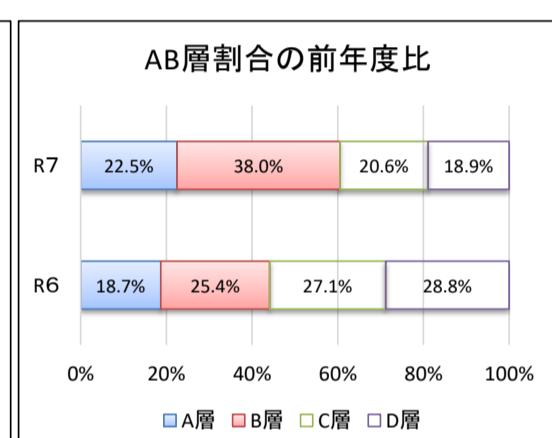
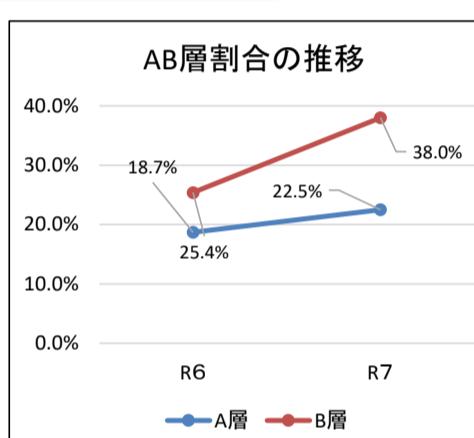


四分位における割合（都全体の四分位による）

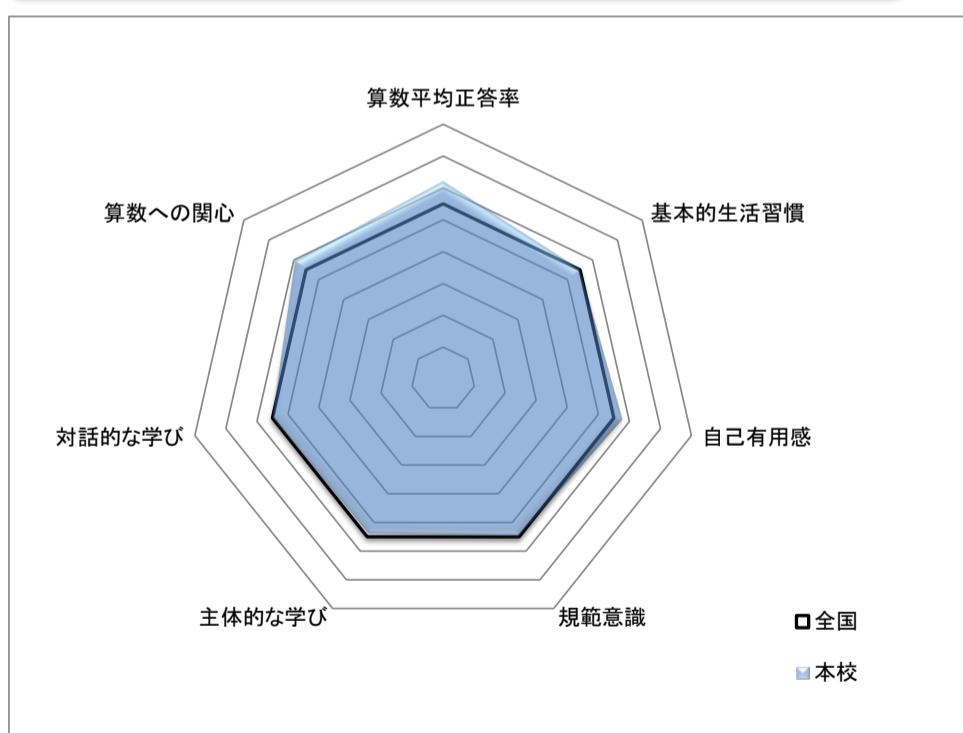
上位 ← → 下位

算数	A層	B層	C層	D層
	14~16問	11~13問	7~10問	0~6問
小岩小学校	22.5%	38.0%	20.6%	18.9%
江戸川区(区立)	22.7%	25.9%	27.9%	23.5%
東京都(公立)	26.4%	25.7%	27.6%	20.3%
全国(公立)	17.3%	25.0%	31.4%	26.3%

四分位とは、データを値の大きさの順に並べたとき、児童数の1/4、2/4、3/4にあたるデータが含まれているのはどの集合かを示すものである。下の表では、四分位によって児童をA、B、C、D層に分けた時のそれぞれの層の児童の割合を示している。なお、本データで示している四分位は、東京都(公立)のデータを基に定めている。



各領域における、全国平均正答率及び、全国の肯定的回答回答合計値を基準とした場合の、本校の様子。



《チャートの特徴》

・全般的に全国とほぼ同じようなバランスで、数値も近くなっている。「算数への関心」「算数の平均正答率」は、どちらも全国よりも大きく上回っている。「対話的な学び」への意識は、全国とほぼ同値であるが、「主体的な学び」では、やや下回っていた。算数への興味関心が高いことが高い平均正答率に繋がっていると考えられるが、児童が主体的に学ぶことができるよう、手立てを工夫していく。児童は「自己有用感」も高く全国よりも値が上回っていた。「基本的生活習慣」「規範意識」「対話的な学び」と同様、今後も意識をさせていく。

《家庭・地域への働きかけ》

・「基本的生活習慣」「規範意識」は全国とほぼ同じ値である。引き続き「早寝・早起き・朝ごはん」など健康や生活に必要な内容、学習内容や子供の活動の様子などを発信して共通理解を図り、協同して子供を育てていけるようにする。「江戸川っ子study week！」や家庭学習なども連携を図り、「小岩っ子タブレットルール」は徹底を促す。連携して学習を進めることで、学びを生活と繋げて考えられるようにしていく。

《現状把握》

●AB層の割合と取組内容について
・「平均正答率」は66%で全国・都・区を上回った。「領域別の結果」でも、「知識・技能」「思考・判断・表現」共に全国、都、区を上回り、「データの活用」「変化と関係」「測定」「図形」「数と計算」の全ての領域で全国、都、区を上回っている(「数と計算」は都と同値)。
・「四分位」から見ると、AB層の割合は、今年度は60.5%で昨年度の44.1%から大きく増えた。特にB層は38%と一番多く、昨年度より12.6%増加し、D層は約10%減り全体的に数値が上がった。
・全般的に高い正答率だったが、問題では、伴って変わる二つの数量の関係に着目し必要な数量を見い出す内容は、全国・都より平均正答率が低かった。共通する単位分数を見い出し加数と被加数がその幾つかを記述する問題の無回答率も約21%と高く、引き続き既習内容を関連付け、まとめたり発展的に考えたりする力をつけていく必要がある。

《学校の取組》

・教員の指導力向上
・校内研究の充実。「主体的に思考・判断・表現する児童の育成～児童の『できそう』を大切にした指導の工夫～」をテーマに、児童が目的意識や見通しをもち、意欲的に問題解決に取り組む手立ての工夫、主体的に思考・判断・表現し、数学的な見方や考え方の良さを実感できるような指導を検討し授業に活かす。
・全国学力テスト、東京ベーシックドリル、江戸川区学力調査、江戸川区学力定着度調査の分析、日頃の児童の学習状況把握による対策、改善、見直しを行い授業の改善を図る。
・校内研修やOJTを通じ若手教員の育成、一人1台端末を活用した授業改善などを図る。

・基礎学力の保障

・「小岩小授業モデル」、学習のスタンダードにより、授業の基本的な学習の流れ、発言の仕方・聞き方などを全学年統一して行う。朝学習の中でTBDや江戸川区学力定着度調査の問題を活用した学習、ドリルや電子ドリルなどを活用した学習を行い、基礎学力の定着を図る。
・各学期に電子ドリルを活用する「江戸川っ子study week！」を行い習熟を図る。各学期に「マスマスワーキーク」も行い、学習の習熟や計算技能の定着を図る。
・算数習熟度別学習では、算数専科と学年で問題内容の検討や教具の工夫をし、数学的な活動を通し理解をできるようにする。

・学習習慣の確立

・家庭学習は、校内で共有し、共通理解のもとで実施する。
・家庭学習の方法は児童や保護者に伝えることで共通理解をし、内容の充実を図る。
・[学年×10+10]分間の家庭学習習慣が身に付くよう呼びかける。
・一人1台端末、電子ドリル、東京ベーシックドリルの活用。朝学習や家庭学習、授業で活用を広げる。
・各学期に1回の「江戸川っ子study week！」ではドリルパークの学習に取り組み、学年によって難易度や分量など個々に合ったコースを選択させる。

・AB層の育成

・引き続き、各学年で基礎基本を身に付ける指導を徹底し、問題解決的な学習の中で児童が既習事項をしっかりと活かすことができるようにしていく。また、伴って変わる二つの数量の関係に着目し必要な数量を見い出す力や、自分の考えを数や言葉を用いて説明したりする力を育てる必要がある。特に自分で見通しをもって考え、伝わるように説明したりまとめたりする活動や、対話的な学びの中で互いの考えのよさに気付いたり、自分の考えを深めたりする活動については、低学年から発達段階に応じて積み重ねていく必要がある。